

Notos on an Interview on Satoyama Life before the 1960s in Sukubo Area Upstream of the Kumaki River, Noto Peninsula

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30456

聞き書き資料：能登半島熊木川最上流に位置する 須久保の1960年代以前の里山利用

堀内美緒^{1,2*}・中村浩二²

2011年9月16日受付, Received 16 September 2011
2011年12月13日受理, Accepted 13 December 2011

Notes on an Interview on *Satoyama* Life before the 1960s in Sukubo Area Upstream of the Kumaki River, Noto Peninsula

Mio HORIUCHI^{1,2*} and Koji NAKAMURA²

Abstract

This article is based on the notes of interviews with an aged former resident of Sukubo, which is an area located near the upper stream of the Kumaki river, Noto Peninsula, Ishikawa Prefecture, Japan. The interviewee was born in 1926 in Sukubo, grew up there, and made his living with various kinds of activities in his local *satoyama* area, including charcoal making, forestry, rice cultivation, and slash-and-burn agriculture. These transcription notes reveal to us aspects of common life in the hilly *satoyama* area of the Noto Peninsula prior to the dramatic changes in Japanese lifestyle and social structure that began in the 1960s and that resulted in the emigration of Sukubo people to downstream villages or urban areas. This article aims to provide basic insight into traditional *satoyama* culture in rural areas of Noto Peninsula before the 1960s.

Key Words: *Satoyama*, Kumaki River basin, interview, utilization of animal and plant resources, Noto Peninsula

キーワード：里山, 熊木川流域, 聞き取り, 動植物利用, 能登半島

I. はじめに

本稿は、石川県七尾市中島町の熊木川最上流域に位置する須久保における里山利用の変遷に関する聞き書きをとりまとめた。熊木川流域は、陸域では林業や農業が行われ、沿岸域（七尾湾）ではカキ・ナマコなどの養殖業が盛んであり、河川を通じた陸域

と沿岸域のつながり、すなわち里山里海の関係をみるモデルとして適している。2010年10月には、総合地球環境学研究所と金沢大学との連携FS研究「能登半島における持続可能な社会構築のための環境半島学の提言」がスタートし、熊木川流域を対象に、土地利用の変遷が流域環境に及ぼす影響を総合的に評価しようとしている。そのためには、人間活動によ

¹金沢大学地域連携推進センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Center for Regional Collaboration, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

²金沢大学環日本海域環境研究センター生物多様性研究部門 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Division of Biodiversity, Institute of Nature and Environmental Technology, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

*連絡著者 (Author for correspondence)

る影響の把握が重要である。しかし、熊木川流域の地域住民による土地利用に関しては、中島町史(1995, 1996)、金沢大学文化人類学研究室による民俗調査(鹿野, 2000)などがある程度で、まとまった研究はほとんどなされていない。さらに、近年、地域固有の伝統的里山利用の経験を有する世代が高齢化し、聞き取りの機会が失われつつある。そこで本稿では、熊木川最上流域の須久保の里山利用に関する地域住民へ聞き取りを行い、町史、民俗調査、統計資料、地形図などの既存資料とともにまとめ、能登半島の里山里海研究の基礎資料として供することを目的とした。

II. 須久保の概要

1) 位置と歴史

須久保は、行政的には石川県七尾市中島町鉦打地区大字河内に属する。鉦打地区は、能登半島の七尾市中島町の北西部に位置し、地区の中央部に別所岳(標高358m)を水源とする熊木川が南流する(図1)。須久保は、熊木川とその支流の河内川の最上流にあり、穴水町との境の山間地に位置する。須久保から

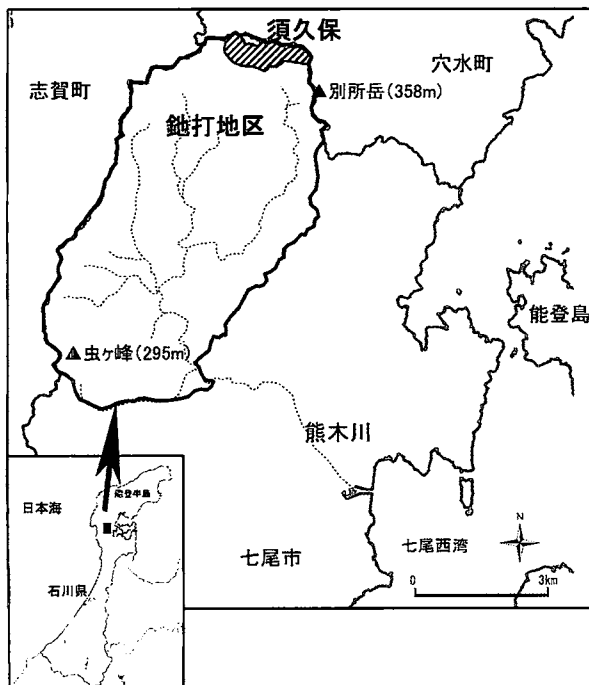


図1 七尾市中島町鉦打地区と須久保の位置。

Fig. 1 Map showing the locations of Sukubo and Natauchi areas, Nakajima town, Nanao City, Noto Peninsula.

は、縄文期の遺跡が見つかっており、古くから人間が住みついた場所であった(中島町史編纂専門委員会, 1996)。

須久保の世帯数は、須久保出身の地域住民への聞き取りにより時代を遡って確認できる明治期以降、7軒であった。ほとんどの家が農業、焼畑、炭焼きにより生活をしてきた。祭礼や青年会組織などの社会的活動には河内の一員として参加した。周辺の間谷地には、同じような10軒未満の集落が点在しており、河内の「呉竹」、穴水側の「切場」「路鹿」などがあった。

鉦打地区の中心地の西谷地から須久保までの道のりは約8kmであった。1916(大正5)年に鉦打小学校分校として「須久保特別教授所」が開設されたが、1973(昭和48)年に鉦打地区の中心地の西谷地に鉦打小学校が新築されると、須久保分校は別所分校とともに鉦打小学校に統合された。なお、鉦打小学校は2004(平成16)年に中島小学校に統合され、現在は七尾市鉦打公民館として利用されている。

須久保は、湧き水がでる水田とアカマツ、雑木林が入り組んだ里山的環境であったため、1961(昭和36)年に当時、絶滅の危機に瀕していたトキ1羽が確認された記録が残っている(金沢大学トキのプロジェクト, 2010)。1960年代(昭和30年代後半~40年代前半)になると須久保の住民の多くは中島町の下流の集落に移動し、農繁期だけ須久保に滞在、もしくは通いの生活を行うようになった。現在でも、通いにより須久保の水田の一部は耕作されているが、ほとんどの農地は耕作放棄されている。なお、七尾市の2008(平成20)年の耕作放棄地全体調査の資料によると、鉦打地区(農地面積296.1ha)の耕作放棄率は34.4%であり、須久保が属する河内(農地面積62.6ha)の耕作放棄率は63.0%、そのうち82.2%は今後農地として活用不可であると判断されている。

表1に、鉦打地区と須久保が属する河内の人口と世帯数の変化をまとめた。鉦打地区全体に比べて、河内の世帯数と人口減少は著しい。河内の人口は、明治から1955(昭和30)年頃まで500人前後であったが、1965(昭和40)年以降減少の一途をたどり、2005(平成17)年には156人となった。これは、昭和40(1965)年の人口の35.8%にあたる。世帯数も1965(昭和40)年には90戸だったのが、2005(平成17)年には57戸(1965年の63.3%)へ減少した。2008(平成20)年

表1 鉦打地区における人口・世帯数の変化.

Table 1 Changes of population and number of households in Natauchi area.

和暦	西暦	河内				鉦打			
		世帯数	増加率(%)	人口	増加率(%)	世帯数	増加率(%)	人口	増加率(%)
明治17	1884	不明	—	489	112.2	412	96.0	2,251	111.9
明治22	1889	不明	—	518	118.8	不明	—	2,512	124.9
昭和29	1954	不明	—	496	113.8	不明	—	2,390	118.8
昭和40	1965	90	100.0	436	100.0	429	100.0	2,012	100.0
昭和45	1970	88	97.8	381	87.4	407	94.9	1,802	89.6
昭和50	1975	79	87.8	320	73.4	386	90.0	1,682	83.6
昭和55	1980	75	83.3	292	67.0	383	89.3	1,558	77.4
昭和60	1985	69	76.7	249	57.1	372	86.7	1,462	72.7
平成2	1990	64	71.1	222	50.9	362	84.4	1,356	67.4
平成7	1995	61	67.8	198	45.4	357	83.2	1,250	62.1
平成12	2000	59	65.6	171	39.2	347	80.9	1,157	57.5
平成17	2005	57	63.3	156	35.8	333	77.6	1,061	52.7

注1：明治17年の鉦打のデータには別所は含まれない。

注2：「増加率」とは、昭和40年を100としたときの各年の割合(%)を示す。

計算式：(各年の人口又は世帯数) / (昭和40年の人口又は世帯数) × 100

資料：明治17年～昭和29年は中島町史編纂専門委員会（1996）800-801p, 昭和40年以降は国勢調査

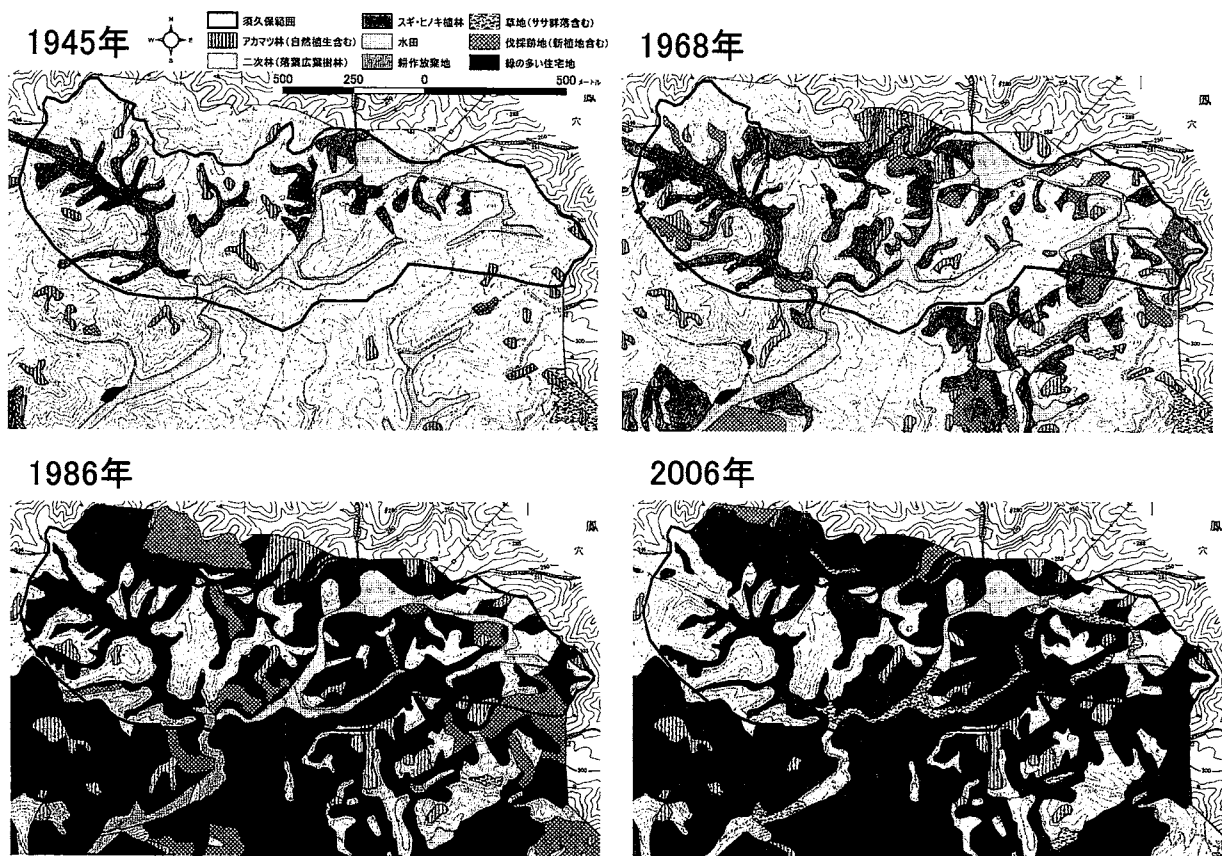


図2 1945～2006年の須久保周辺の土地利用・植生の変化 (金沢大学「里山里海再生学の構築」平成22年度事業成果の一部 (データ作成, アジア航測株式会社)).

Fig. 2 Map showing the changes in land use and vegetation around Sukubo area from 1945 to 2006.

における高齢化率 (65歳以上の割合) は、鉦打地区 37.4%, 河内48.4%である (七尾市役所資料, 2008)。

2) 土地利用の変化

最近筆者らは、航空写真をもとに熊木川流域の植生・土地利用を判読し、図2は、それによって作成し

た1945（昭和20）年，1968（昭和43）年，1986（昭和61）年，2006（平成18）年の須久保周辺の変化である。1945（昭和20）年の須久保では，平地は水田，谷筋はスギ・アテ（ヒノキアスナロ）の植林地，尾根筋にアカマツ林が分布し，それ以外は広葉樹二次林が広がっていた。集落は航空写真からは判読されなかったが，北東側のまとまってある水田の周囲に須久保の集落があった。1968（昭和43）年には，スギ・アテの植林地と伐採地が広がり始めた。これは，石川県林業公社が設立した2年後であり，ちょうどこの頃，須久保では炭焼きはほとんど行われなくなり，須久保からの移出が始まった時期と重なる。1986（昭和61）年には広葉樹二次林よりもスギ・アテの植林地の割合が大きくなった。1968（昭和43）年には水田の耕作放棄地は見られなかったが，1970（昭和45）年に米の生産調整（減反政策）が開始され，1986（昭和61）年には耕作放棄地がみられるようになり，耕作放棄地は2006（平成18）年にはさらに草地や広葉樹に変遷した。

このように，須久保を含む熊木川上流の植生・土地利用の大きな変化としては，1965（昭和40）年前後を起点としていたスギ・アテ植林地の拡大とその後の耕作放棄地の拡大と2点が重要であり，その背景には，石川県林業公社の設立，減反政策の開始，離村者の出現があったことがいえる（日本の里山・里海評価，2010；日本の里山・里海評価－北信越クラスター，2010）。

Ⅲ. 1960年代までの須久保における里山の暮らしと動植物利用

本章では，筆者（堀内）が行った，須久保出身の清水博氏〔七尾市中島町西谷地在住，大正15（1926）年生まれ〕への聞き取りを主として，須久保の里山における動植物利用についてまとめた。聞き取りは，2010年7月21日，8月6日，12月17日，2011年8月11日の4回行い，1回2，3時間ほど自由な対話形式で行った。清水氏は，須久保に生まれ，父親から受け継いだ農業や炭焼きを生業としていたが，炭焼きの仕事がなくなった1965（昭和40）年頃からは土建業に従事するようになり，1973（昭和48）年に須久保の下流に位置する西谷内に移動した。その後も，しばらくは須久保の耕作に通っていたが，現在は須久保に

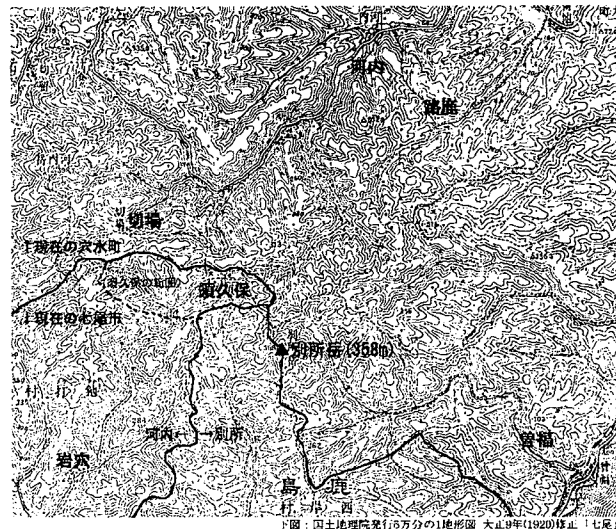


図3 須久保周辺の地名と位置関係。
Fig. 3 Major location names around Sukubo area.

通うこともほとんどない。話中の地名や須久保の範囲地図を図3に示す。

1) 里山利用

1-1) 春の山焼き

清水氏の祖母の時代^(注1)までは，別所岳のあたりでは，春先に山を焼いていた。個人の山がまだない時代^(注2)の話で，当時は，鳳至郡や穴水町の境はあったが，山は個人個人に分かれていなかった。山を焼いた理由は，大きな蛇やオオカミがいて怖いところだったから。穴水の鹿路集落では，山へ夏に牛を放し，家に連れてゆかず山に置いたままだった。牛が



図4 須久保の集落跡（2010年6月，堀内美緒撮影）。
Fig. 4 An abandoned site in Sukubo settlement (June 2010).

なくので見に行くとオオカミ^(注3)が何頭か来て、牛を一頭殺して食べていたという。そんなことがあったので、とにかくオオカミが棲んでいるようなところを燃やして、隠れるところをなくして、どこまでもきれいに見えるようにするために、山を焼いていた。山を焼いた後に立ち枯れになっている木を、囲炉裏に焚く薪にするためにあちこち行った。それだけよく山を燃やしていたという。

1-2) 炭焼き

1-2, 1) 白炭と黒炭

清水氏の両親は白炭を焼いていた^(注4)が、清水氏は白炭を焼いた経験はなく、専ら黒炭を焼いていた。白炭は、まだ熱く赤い状態の木炭を窯から引き出すのが、黒炭の場合は、窯の穴をふさいで、木炭が冷たくなってから窯中に入って運び出した。黒炭にはクリやマツはだめで、ナラの木が一番よかった。

炭焼きはコツがあり、切り口がみかんを切ったような炭はいい炭で、レンコンの穴のようだと、柔らかくて握ればつぶれるような悪い炭だった。

炭焼きをするときは、まず窯に詰めた原木を2日間乾燥させた^(注5)。そして、3日目に、夜明け前から窯で火を焚き始めた。火を消しても炭窯がひとりで燃えていくようになったら^(注6)、ネアナ(窯の口の穴)は開けたまま焚口に戸を当てて塞いだ。この時、1時間で5分(約1.5cm)だけ燃え下がれば一番いい炭ができる。5分炭化するには、煙突のオオ(煙出し部分の穴)の調節が鍵であり、窯の中の火力を見な

がら、番線でおおの大きさが半分ほどになるまでふさいでいった。その後、窯を3日間蒸し焼きにした。青い煙が出るようになったら、ネアナとおおをふさいで、窯の中で炭を冷ました。3日たてば、窯の中に入られるようになるので、炭を抱えて窯から運び出した。

1-2, 2) 炭の運搬

1回の炭焼きで、約50俵(約800kg)の炭ができた。須久保で焼いた炭は、岩穴集落まで4kmの道のりを人間が担いで運搬した。1回に男性は1人4俵(約60kg)、女性は3俵(約48kg)を担いだ。岩穴からは馬車によって鉦打地区の中心地の西谷内の農協や炭を扱う店まで運搬した。

炭はセナコという道具を使って背負って運んだ。セナコの材は、軽いキリの木で、背中に当たっても痛くないように細い縄を巻いていた。セナコは重宝なもので、当時はどこの家でも使っていた。

1-2, 3) 炭焼きの時期

炭焼きは一年中やった。農繁期以外は夏も冬もほとんど炭焼きだった。炭焼きをしていけば仕事がないということはなかったし、炭を運んで、たまに下流の町場に出てくれば、肉でも魚でも食べられた。

冬にたくさん雪が降れば炭焼きはできなかった。その理由は、炭にする木は、雪をスコップで掘って根元から切るので、たくさん雪が降ったら掘り出せないから。雪の上から、根元から1~2メートルのところまで木を切ることはしなかった。

1-2, 4) 炭焼きの場所

炭焼き窯の場所は、泥がいいところだった^(注7)。その山の木を焼いてしまえば、また別の山へ移動して窯を作った。

自分の山があれば、自分の山で炭を焼いた。清水氏は約20町歩の山を持っていた。須久保で一番の山持ちの人は、昔から50町歩の山を持っていた。自分の山があっても、人の山を買って焼く人もいたし、山持ちの人は炭山を人に売って生活をしていた。

須久保の住民は他の集落の山で炭焼きをすることはあまりなかったが、須久保の山へは、穴水町や輪島市三井、志賀町富来などから人がきて炭焼きをした。よそから来た人は山小屋を作って、そこでご飯



図5 炭窯跡 (2011年5月、堀内美緒撮影)。

Fig. 5 An abandoned site of charcoal making kiln (May 2011).

を作って寝泊りしながら炭焼きをしていた。あっちにもこっちにも煙がたつて、炭を焼いていた。

炭焼きをしていた頃は、アオキ^(註8)が植わっていた山はあまりなく、どこにいても雑木山だった。雑木は下刈りをしなくてもよかった。それで、30年も経てば、また切って炭を焼くことができた。

1-2, 5) 炭焼きと植林^(註9)

戦後、植林が盛んな時代になり、炭焼きのために自分の山の雑木を切った跡地にアオキ（主にスギ）を植え、毎年下草刈りをして、アオキだけを残して育てた。アオキが大きくなってくれば、下にコナラなどが生えてきても育たない。そうして多くの雑木が絶えてしまった。

戦前も、アテの苗を作って、自分の山に植えてみたこともあったが、大々的にはやらなかった。戦後、盛んに植林をした理由は、国が補助金くれたから。自分の山に木を植えて補助金をもらえ、下草刈りしたらまた補助金がもらえる、とみんな盛んにやっていた。最後に炭焼きをしたのは1962～1963（昭和37～38）年だった。

1-2, 6) 炭焼き以外の山仕事

須久保では、炭焼きと稲作が主な仕事だったが、たまに木材業者^(註10)が来て、山を買った場合は、馬車引きを頼んで木を出す仕事があった。戦前は、材木を買う人はあまりいなかった。それが終戦後、木材登録業者ができて、木を分けてくれないかと頼まれた家では何人か人足を雇って、切る、担ぐ、冬ならソリで運搬する仕事をした。穴水町の河内の木材業者が須久保へ来ては、この木を分けてくれ、と頼んでいった^(註11)。今でも、スギは金にならないが、アテなら分けてくれという人もいる。

1955（昭和30）年頃までは、木材は、炭を担ぐセナコと同じもので人間が担いで搬出した^(註12)。4mある木材も人間がセナコで背負って運び出した。須久保の木は、穴水側の山を越して県道まで出した。山をあがるときは担いであがり、下りはソリやキンマ^(註13)で出した。

1955（昭和30）年頃以降は、人間に代わって馬がジビキするようになった^(註14)。河内で馬の仕事をしている人は4～5人いた。須久保にも1人、馬の仕事をする人がいた。須久保の住民は水田耕作に牛を使っ

たが、その人は水田耕作にも馬を使った。清水氏が須久保から移動した1973（昭和48）年頃まで馬が活躍していたが、機械が入ってきたら馬がいなくなった。

1-2, 7) 石川県林業公社による植林

須久保地内に岩穴の住民が共同で所有している20町歩ほどの「二人仲間の山」があり、石川県林業公社が植林（公社造林）をした^(註15)。この山は、公社造林にする前は、雑木山であり、他の町村からも炭焼きの人が来て、山を分けてもらって、山小屋に泊まり、3、4人で炭を焼いていた。須久保地内の他の山は、大部分が須久保の住民が個人で所有する山であり、共有林はなかった。須久保の住民で個人名義の山を公社造林した人も一人だけおり、場所は岩穴地内、面積は4町歩ほどあった。

公社造林では、スギがたくさん植えられた。スギは種をとってきて、苗畑に蒔くとたくさん生えてくるのでそれを使った。アテは実がならないので、よさそうな枝を切ってきて挿し苗をした。アテの苗は少ないのでスギが植えられることが多かった。

1-3) 焼畑^(註16)

須久保には、水田もあったが、アズキやソバ、アワを作るためには、山を焼いてノヅクリ（焼畑）をした。須久保全体で水田は5町歩あり、1軒で6反ほどの水田を作っていた。畑は、水田の上の山を少し切り開いて、ダイコンやゴボウなどを植えたが、面積は少なかったので焼畑をした。

焼畑をした場所は、別所岳の下で、穴水町曾福の坂本三十次^(註17)の山だった。土地の肥えたいいところで、ソバやアズキをたくさん収穫した。

焼畑は、7月下旬頃に1回草を刈って、それが枯れた盆過ぎに燃やした。燃やすのは、夜の風がおさまった時分だった。土地を区切って、竹箒で火が上にあがらないようにしてから、火をつけてきれいに焼いた。その後で1年目はソバを蒔き、12月頃に刈った。次の年はアズキを蒔き、それで終わりだった。ソバとアズキを収穫したら、その地面は痩せるので、その横隣へ行ってまた焼畑をした。

焼畑の1回の面積は、3～4反ほどだった。焼畑をするときは、須久保の集落みんなで行った。焼畑ひとつでも、住民みんなの心がひとつにならなければ

きなかった。

焼畑をしたのは、清水氏が14～15歳の頃（1940年頃）までだったが、終戦後も1、2回やった。1950（昭和25）年頃、植林が盛んになり、山のてっぺんにも植えるようになった。焼畑をしていた曾福の谷の奥まで植林が行われるようになり、焼畑をする場所がなくなった。かつて焼畑をしていたところに、今は大きなスギが生えている。

1-4) カヤ

清水氏が子どもの時までカヤ（ススキ）は現金収入源だった。春になると、カヤの葉（ハカマと呼ばれた）が雪に押されて下にさがり、まっすぐな芯（茎）だけになった。そのようなカヤはハネソガヤと呼び、根元から刈って、周囲3尺（約90cm）ほどの束にして、現金にした。

清水氏は、ススキを刈って売った経験はない。小学校の4～5年の頃（1935年頃）、祖母が山から刈って背負ってきた姿を見たことがあり、その頃は中島町にカヤを扱う店があったという。汽車がない時代で、何軒か船問屋があり、七尾から船で肥やしを積んできて、中島からは炭やカヤを積み出した。

須久保の家はみんな、戦後までカヤ屋根の家だった。カヤは、一年では準備ができない。屋根を葺くには相当なカヤが必要だった。カヤノウチと呼ばれるカヤを採る場所を家ごとに必ずもっていた。山に木が生えないようにして、カヤが生えているところをこしらえた。カヤノウチの広さは、山の状況によるが4反ぐらいだった。

稲の収穫後、カヤを刈って束に縛り、木に立てかけて乾かした後、担いで家に持ち帰り、家の周りにカヤガケといってカヤで雪囲いをした。雪が消えたら雪囲いを壊して、家の2階へ上げて保管した。下の囲炉裏で火を燃やせば、カヤがすすけて強くなった。カヤは何年分も刈りためておいた。

昔のカヤ屋根は、ヨヘラといって、4面に分けて葺いた^(注18)。前から葺いて、カヤがなくなったら何年かカヤがたまるまで待って、後ろを葺いた。1回葺けば、何十年も葺かなくてよかった。毎年、7軒のどこかの家がたいてい屋根の葺き換えをしていた。屋根を葺く時は、須久保の住民みんなが集まって葺いた。職人に頼まなくても、みんな屋根を葺く技術をもっていた。

炭小屋の屋根は山に生えているササで葺いた。ササは、戦後の昭和30年頃（1955年頃）、おそらく一斉に花を咲かせて枯れたせいで、一回絶えてしまったことがあった^(注19)。今はまたササが回復している。

2) 動物利用

2-1) 焼畑と獣害

清水氏の父親は、1905（明治38）年生まれだった。父親が子どもだった1912（明治45）年頃まではシカ（ニホンジカ）がいて、冬になれば、猟師（鉄砲打ち）が泊らせてくれと父親の家にやってきた。猟師は、鉄砲を担いで、犬を連れて、シカを捕まえるために山へ行った。シカが寝ているところは、ハチヨリバといって南向きの暖かいところで、いつも決まっていた。

雪が積もるとシカは山の中にはいられなかった。曾福から西岸の海岸へ出て、泳いで能登島へ渡っていた。須久保の山間部からはカンジキを履いて追っかけてゆき、沿岸の住民は船で追っかけて、竹槍で突いて捕まえたという。そのようにして、シカは絶えてしまった^(注20)。

当時、焼畑をするとシカが来るので、夜の番が必要であった。清水氏が焼畑をしていた頃は、もうシカは絶えてしまっていたから、番の必要もなかったが、父親の頃は一晩のうちに5～6匹もシカが出て来て、ソバを食べてしまうので、松明を焼畑の周りに立ててシカの番をした。

イノシシとクマは、須久保周辺には昔からいなかった。いたのは、シカとオオカミ、ウサギであった。

2-2) 冬の狩り^(注21)

昔、雪は2mほど積もった。冬場の食べ物は、白菜や大根の塩漬けくらいだったので、ウサギやヤマドリ、キジが貴重なたんぱく源だった。ウサギやキジを捕まえるには、習性をよく知ることが大切で、習性を利用して狩りをした。狩りの方法は、上の世代の人がやっていたのを見て覚えた。

2-2, 1) キジ

たくさん雪が降って、炭焼きができない2月頃、「今日はキジを追っかけるのいい日や、行こう」と、須久保の大人みんなで弁当を持ってキジを捕り

に行った。キジを捕りに行くのは、夜中から急に気温がさがってきた次の日で、天気がいよいよ晴れた。そういう日は人間が歩いてはまらないくらい雪が硬くなっていた。そこへ柔らかい雪が降った時分がキジを追いかけるのに一番都合がよかった。雪の上を歩くときは、萌芽したハゼノキで作ったカンジキを履いて出かけた。

キジは、びっくりするといったん飛びたつが、山を越して遠いところへ飛んでいくことはできない。ラクダの背中みたいな地形のところだったら、キジはその一番低いところを越し、隣の谷に抜けていこうとする。古者は、あそこにいるキジを飛びたせば、どこへ行くかということがちゃんと頭にある。川のふちにキジの跡があると、「お前はあの山のあそこへ上がって待って見とれ」「お前はこっちに上がって見とれ」と、遠見という人間を何人か出しておく。それで、「おーい、たった（飛んだ）ぞー」という声で、みんなが張り切って見守っている中、「誰のところへ来たぞー」と言われた人が飛びこんで来たキジを捕まえた。

キジはミハネとって、3回飛ばせたらうまく飛びたつことができなくなる。そうやって、キジの習性を利用して捕まえた。多いときは、一日で2~3羽捕った。

男性たちがキジを捕まえていた間、須久保の女性たちは焼畑で収穫したソバを打って待っていた。夕方、キジを捕まえて帰ってくると、羽をむしって、大きな土鍋の中へ入れて、ソバのかけ汁にして食べた。7軒のどこの家にも集まって、須久保の子どもから大人までみんなで食べた。

2-2, 2) ウサギ

ウサギは冬の雪が積もったときに、カンジキをはいて一人で捕まえていった。ウサギが木の根元で寝ているのを見つけたら、息を潜めて、寝ているところの背後に回った。木の枝をたくさん切って抱えて、ウサギが寝ているところの上へピューンと投げた。ウサギは、いくら足が速くても空から来るものが恐ろしい。空からたくさん来るなどと思えば、これは逃げてだめだと寝ている木の根元に穴をほって入ろうとする。そこを、カンジキで雪を踏みしめて穴をふさいでしまう。ウサギが穴をあけてでようとする音がしたら、もっと踏み固めて出て来られないよう

にした。それから木の枝を削って剣のようにして、穴のウサギを仕留めた。清水氏は、17~18歳の時（1943年頃）に、そうやって1回ウサギを捕まえた経験がある^(注22)。

IV. おわりに

本稿では、能登半島の熊木川上流域の土地利用や人口動態の変遷を既存資料から整理した上で、聞き取りによって最上流域の須久保で1960年代まで行われていた伝統的里山利用の一部を記した。

鉦打地区において、現在みられるスギ植林地の放棄と耕作放棄地の拡大という土地利用の問題は、1965（昭和40）年前後を起点としていることを把握できた。日本社会全体をみたときに、里山と人との関わり合いが大きく変化したのは、高度経済成長が始まった1955（昭和30）年が起点だと言われている（有岡，2004，pp.101-114）。須久保では、1962~1963（昭和37~38）年を最後に炭焼きが行われなくなり、住民は下流へ移動し、里山は利用されなくなり、里山に暮らす技術や知恵も伝承されなくなっていった。

地域ごとの里山利用の履歴を知ることは、里山の適切な管理法をこれから考える上でも重要である。今回は、熊木川上流の須久保の里山で、大正から1960年代まで生活した1人の里山利用者を事例として取り上げ、資料としてまとめた。今後、さらに同時代の能登半島各地の里山利用についての聞き取りを積み重ね、消えつつある里山の知恵を蓄積していく必要がある。それとともに、里山保全の方向の判断材料として活用するためには、他の聞き取り事例や資料と比較して、本文に示した里山利用法のうち清水氏個人や須久保に特有なものと、能登半島共通のものを区別する作業が必要である。

謝辞：本稿をまとめるにあたり、清水博氏（中島町西谷地）、唐川明史氏（鉦打ふるさとづくり協議会会長）、村田正明氏（同事務局）に多大なるご協力をいただいた。鏡味治也教授（金沢大学人間社会学域）に統計・民俗資料収集に関してご協力いただいた。厚く御礼を申し上げます。

注

- (1) 山焼きに関しては、すべて清水氏が祖母(1880年代頃生まれ)から聞いた話であり、里山が入会地だった時代背景からも明治前半までの話だと考えられる。
- (2) 近世の里山の多くは入会地の形式をとっており、入会権は村の共同体に帰属し、各家は共同体に参加することによって、里山の草木を利用できた(山口隆治, 2008, 26-27)。明治期に入っても、地租改正事業によって里山が個人の私的所有に分割されるまで、入会地は続いた(有岡, 2004, 35-49)。
- (3) 「石川の動植物改訂3版」(1993, p.46)によると、オオカミ(ニホンオオカミ)は、過去1世紀の間に石川県から姿を消した動物のひとつである。古い記録や資料が少数あるものの、ノイヌとの判別が困難であり絶滅過程は不明である。
- (4) 中島町山間部では、昭和初期まで、白炭を焼いていたが、その後黒炭を焼くようになった(中島町史編纂専門委員会, 1995, p.724)。
- (5) 原木を窯に詰め込み、窯の焚口で火を焚き続けて、原木の水分を抜く作業。清水氏は、この作業を「炭のつけこみ時期」と呼ぶ。
- (6) 原木が炭化を始める状態
- (7) 窯の設置場所の土は、粘土質の赤土が好ましく、石混じりの土質はふさわしくない。以前の窯跡が近く、窯作りの材料としての焼け土が運びやすいところで、30~40度の傾斜地という条件を満たす場所が炭焼き窯設置場所選ばれた(中島町編纂専門委員会, 1995, p.724)。
- (8) 中島町では、スギ、アテ、ヒノキを総称して、アオキと呼んだ(中島町編集専門委員会, 1995, p.721)。
- (9) 植林はキウエといい、11月から3月までの間に行った。アテの苗は通常自家で育てた。スギは苗を購入したという。別所では門前町まで買いにいった(中島町編纂専門委員会, 1995, p.723)。
- (10) 材木業者(別所・河内ではヤマキリと呼ぶ)が主体となって行う仕事としては、伐採(キキリ)、製材(コビキ)、搬出(ボッカ)などがあった(中島町編纂専門委員会, 1995, p.721)。
- (11) 中島町河内では鉤打地区の材木業者が関わり、小牧の港で越中の商人に売られた(中島町編纂専門委員会, 1995, p.724)。
- (12) 中島町では、木材の搬出は、人が担ぐのが通常であった。1人で担ぐ方法には、タテカツギ(セナコを背負い、大きな木材を背中に縦にして担ぐ方法)やヨコカツギ(3メートル以上の木材を横にして担ぐ方法)などがあった(中島町編纂専門委員会, 1995, p.722)。
- (13) キンマとはソリのことで、キンマミチ(搬出路)に丸太(ゴロ)を間隔をおいて敷き、木材を積んだキンマを肩縄で引っ張って運んだ(中島町編纂専門委員会, 1995, 722-723)。
- (14) 当初は、木材の端に堅縄をつけて人間が直接引っ張ったが、後に馬を使うようになった。馬の仕事をする人を「馬車引き」といった(中島町編纂専門委員会, 1995, p.722)。
- (15) 1966(昭和41)年、石川県は石川県林業公社を設立し、中島町森林組合も同年から公社造林分収契約事業による造林を実施した。造林したくても僻地で道路がなく労力と資金に恵まれない山林所有者に、実測一団地10ha以上まとまると、森林組合が責任を持って施業管理し、50年後に収益を公社6割、地主側4割で配分する制度であった。中島町森林組合は、1967(昭和42)年から10年間で約195haの造林を実施し、1981(昭和56)年をピーク(1年で約90ha造林)に造林面積は減少した(中島町編纂専門委員会, 1996, 624-625)。
- (16) 別所では、焼畑を「ノーする」といった。河内では、1955(昭和30)年代まで焼畑が行われていた。伐採後、山を植林する前に焼畑にするのであり、目的はあくまで植林だったという。1年目はダイコンやソバを植え、収穫したらすぐに植林をした。2年目は、植林した木の間にアズキを植え、3年目以降は行わなかった(中島町編纂専門委員会, 1995, 725-726)。
- (17) 坂本三十次(1923-2006)は、石川県穴水町出身の政治家で、元衆議院議員。
- (18) 鉤打地区では、屋根の棟と平行で長辺側をオオヒラ、棟と直角な短辺側をオギノマと呼んだ。
- (19) ササは一斉に開花し、結実した後に枯死し、その後種子により更新する生活史をもつ(室井, 1973, 25-38)。
- (20) 能登半島中部では大正年間までシカ(ニホンジカ)が生息していた。絶滅原因としては、農業の被害が多いことから捕りつくされたと考えられている(石川県環境部自然保護課, 1993, p.46)。明治年間までにはいくつかの記録文書も残っており、鉤打地区の座主家にはシカ猟に使われた槍が保存されている。
- (21) 中島町山間部では、冬季間にウサギ猟(ウサギトリ)やムジナ猟(ムジナボリ)が広く行われた。ウサギは個人で、簡単なワナで捕らえたため、別所・河内ではワナ

カケといった。ムジナは、イタチ科アナグマのことで、別所では、穴の周辺や通り道にワナを仕掛けて取った。河内では、穴の入り口でトウガラシ燃やしていぶされて出てきたムジナを捕らえた。捕まえたウサギやムジナの肉は、すき焼きにして野菜と一緒に食べた(中島町編纂専門委員会, 1995, 726-727)。

(22) このようなウサギ狩りの方法は、能登以外の積雪の多い山間地でも見られる。例えば、京都府丹後半島では「バイ投げ」と呼ばれる。

文 献

- 有岡利幸, 2004: もの与人間の文化史 里山Ⅱ. 法政大学出版局, 東京, 265p.
- 石川県環境部自然保護課, 1993: 石川の動植物改訂3版. 123p.
- 金沢大学トキのプロジェクト, 2000: トキやコウノトリが能登に舞い降りる日をめざして. 自然との共生による地域づくりをめざして 能登振興研究プロジェクト報告書, 200p.
- 鹿野勝彦, 2000: 中島町と鉦打地区の概要. 金沢大学文学部文化人類学研究室調査実習報告書, 1-10.
- 室井 綽, 1973: 竹, もの与人間の文化史10. 法政大学出版局, 東京, 324p.
- 中島町史編纂専門委員会, 1995: 中島町史 資料編上巻. 中島町役場, 888p.
- 中島町史編纂専門委員会, 1996: 中島町史 通史編. 中島町役場, 1038p.
- 日本の里山・里海評価, 2010: 里山・里海の生態系と人間の福利: 日本の社会生態学的生産ランドスケープ概要版一. 国際連合大学, 東京, 36p.
- 日本の里山・里海評価—北信越クラスター, 2010: 里山里海・日本の社会生態学的生産ランドスケープ—北信越の経験と教訓一. 国際連合大学, 東京, 109p.
- 山口隆治, 2008: 加賀藩の入会林野. 桂書房, 富山, 171p.